

第17号



川越初雁会



今後の初雁会の活動について

令和二年七月十八日に役員幹事会が川越高校体育講義室で、役員二十二名の出席をもって開催され、今年度総会の議案が討議されました。内容に関しては、別添の資料に詳細を報告いたします。



役員会で議案を説明する岩堀会長

今後の活動について

コロナウイルスの世界的な蔓延によって、様々な行動が制限されている現状に鑑みて、私たち初雁会の活動も、工夫をして行動をとらなければならぬ状況にあります。

今年度の総会、秋の旅行会など状況を見ながら、計画する予定です。現在予定している行事を以下に記します。

総会について

新型コロナウイルスの感染再拡大により、実際の集まりは中止とし、書面にて議決するものとなります。八月一日に議案書を会報とともに郵送し、同封の葉書にて議案の賛否を返信して頂きます。八月三十一日を期限とし、過半数の賛成をもって賛同いただけましたものとします。



川越高校講義室で行われた役員会

散策会

秋 十月三日(土) 明

治神宮の森散策(予定)

春 未定

講演会

令和三年三月二十日

(土) 川越高校同窓会館

午後三時から 講師未定

秋の散策会の予定地

明治神宮の森と本多静六

本多静六博士は、慶応二年に現在の埼玉県久喜市で生まれ、日本で最初の林学博士となり、明治神宮の森や、大宮公園などの造林の設計に携わりました。

明治四十五年明治天皇は崩御され、御陵は京都伏見桃山に内定していましたが、東京にもそれに代わる物をとの市民の声があり、渋沢栄一、東京市長阪谷芳郎らが協議し、「神宮の内苑は国費で、外苑は献費で造営すること」が可決されました。これを受けて大正二年造林園芸担当として本多、川瀬、福羽らが参加し造林計画が始まりました。神社林の理想像として、仁徳天皇御陵を考え、墳丘の森林は密林状態の原生林で、人手を加えない極相状態を維持できる森でした。本多らが考えた神宮の森は「自然の森」であり、百年後には人工の森が自然の森と見紛うほどの林相になり、しかも永遠に存続する森を造ることでした。まさに、本多の目論んだとおりの森になっています。

川越高校に

奨学金を寄贈

百二十年記念事業の一環で募集された奨学金に、川越初雁会としてこれまで積立金の内から、二十万円を寄付させて頂きました。

「私の川越物語」に取り組んで

解体された川越藩の復権と耳を傾けたい先人たち

圓山 寿和 (高十七回)

平成三〇年の秋、港区田町に会場を置く「シニアエージ・サロン(株)電通〇Bが中心」に参加した際、「川越に思い入れのある圓山さんに、川越物語をテーマに今の川越の賑わいの源泉を深掘りしてもらいたい」と、こちらをその気にさせる響きのテーマで卓話依頼をされました。

川越のまちの賑わいについては、江戸時代初期の川越藩主・松平信綱の行った町割り／都市計画が基軸となり、その後、まちの広がりとともに郷分(まち部の周縁部)が徐々に活性化し、やがてそこへ賑わいが移行していつている面があると思っていました。

そのこともあり、川越の地層の重層化の過程を辿っ

てみようとして、自分を叱咤し卓話を引き受けました。

新たな気持ちで川越のまちと対面し、歴史が刻み込まれたまちを眺め、歴史上の人物を思い浮かべ、川越が培ってきた風土を探ってみることにしました。

準備に入っただけで、川越の知識がうろ覚えの上、思い込みが多いことに気付きました。これではどうしようもないと川越の歴史の本を手に入れました。

その際、「川越藩／シリーズ藩物語、重田正夫著」によって基礎知識の整理が可能となりました。この本は大野政己氏(元川越市立博物館長)から、いい本がありますよと教えられ購入していた本でした。

ここをベースに川越市発行の「川越市史」や川越藩

主・松平信綱の人物叢書などを読み、歴史的事象やそこでの人物像を冷静に眺め直す気持ちが高まりました。物語の構成では、名のある歴史上の人物が今の川越へ照射しているものに焦点をあて、川越の立地特性である江戸・東京との繋がりを基軸にしました。

令和元年五月十八日、卓話の場に臨みました。まさに「私の川越物語」でしたが、話し終え「川越のことが身近になった」、「江戸との繋がりの深さを感じた」との言葉も頂き、それが励みになり深掘り意識を持続させてもらっています。

準備作業では「川越は深いな」と感じました。「川越市史」の各執筆者は錚々たる研究者であることを知り、地元川越の歴史家(今は亡き岸伝平、岡村一郎、大護八郎氏等)の著作物の貴重さにも気付きました。

ここでは卓話の要約も兼

ね、強く印象に残る二つのことを記しました。

解体された川越藩の復権

物語そのものは、徳川家康が関東に転封になり、後北条氏の傘下にあった川越を要衝の地とし、秘蔵っ子の酒井重忠を川越へ入封させてから今に至るまでの流れで組立てました。

先ず松

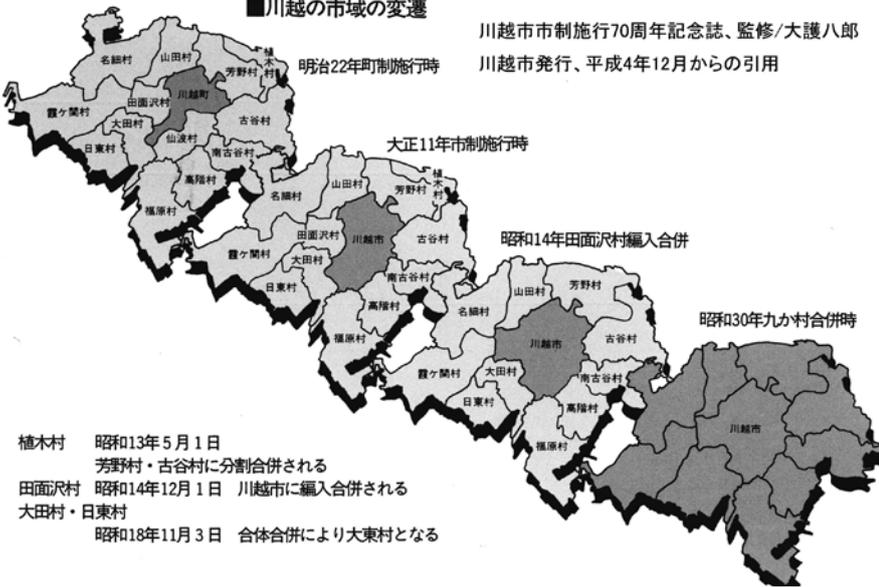
平定信の町割りの重要性を再確認しました。しかし今回興味を持ったことは、明治維新後の川越藩の推移と戦後の憲法下でなされた隣接九か村との合併

の経緯でした。

明治維新の版籍奉還から廃藩置県、明治一七年の地方制度改正に至る過程で、川越藩の所領(城付地等の一体的区域)が分解され、狭い区域に押し込まれた川越町が、大正一一年の市制施行を経て、戦後昭和三〇年に旧藩時代の城付地と一

■川越の市域の変遷

川越市市制施行70周年記念誌、監修/大護八郎
川越市発行、平成4年12月からの引用



体となった合併を成し遂げたことでした。

そこには中央集権化を志向した明治維新政府との対応の中で、川越人による解体された川越藩の新たな形での復権の過程を見る思いがしました。

① 明治一七年の地方制度改正で生まれた連合町村で戸長役場の置かれた川越町は、旧城下町に限定された区域で、その規模は次の通りでした。

・川越町、松郷、小久保村、寺井村、東明寺村、脇田村の戸数計／2, 772戸、人口計／14, 349人、区域／東西十五丁≒1, 635m、南北二十丁≒2, 180m、想定人口密度4, 030人

② 明治二三年の町制施行時に小仙波村を編入した後
・大正九年時点、面積7.46km²、5, 036世帯、人口24, 675人、人口密度3, 307人

③ 大正一一年の市制施行時に仙波村を編入合併した後

・大正一四年国勢調査、面積13. 33km²、6, 507世帯、人口31, 905人、人口密度2, 393人

④ 昭和一四年に田面沢村を編入合併した後

・昭和一五年国勢調査、面積17. 17km²、7, 866世帯、38, 407人、人口密度2, 236人
⑤ 昭和三〇年四月に隣接九か村と合併した後
・面積110. 28km²、



昭和30年／合併調印式

人口104, 854人、19, 799世帯、人口密度951人(*数字は「川越市合併史稿」から引用)

川越市は、大正一一年の市制施行後も依然として人口稠密な状態に置かれていましたが、今回の合併で市域面積も100km²を超え、人口も10万人を超えました。(*令和元年一月一日現在、人口353, 371人、159, 831世帯、人口密度3, 237人)

この川越藩の所領(城付地等の一体的区域)の復元とも言えるべき隣接九か村との合併が、川越の復権の布石となり、首都圏の一翼を担い得る都市へと脱皮していく道筋が開かれました。

昭和三〇年代半ばから大東地区での川越・狭山工業団地の造成が始まり、同じく名細地区では東洋大学工学部の用地も確保され昭和四〇年四月に開学となりました。市域拡大により都市

としての基礎体力もつき、都市基盤整備の方向も見えてきて、農・商・工のバランスを取りつつ、学を付加していく都市づくりが可能になりました。

合併の中心にいたのは市長・伊藤泰吉でした。戦後の民主主義の下、政争の多かつた川越の地方政治の場で機が熟するのを待ち、市議会を始め各界各層を近接九か村との合併に向けて手腕を発揮した姿には敬服せざるを得ません。市行政のトップとして、戦後確立した地方政府の公選首長として、その権限(自治)と手法(協議会・発信)を使い切っていました。

伊藤泰吉は誰もが認める学歴、経歴の持ち主(*注参照)でした。終戦後、朝鮮総督府の職を離れ、四七歳で川越の地に戻り地域の期待を背負い、昭和二一年九月に市長になりました。時を経て故郷に戻り、川

越の変わらざる現状を見て、川越の復権の活路は地域の拡大だと見抜き、時機(合併へ向けての国全体／政府の動向、本市の終戦直後からの対応状況)を見てそこに賭けていこうと肝に銘じていたのでした。

*注：伊藤泰吉は明治三三年、川越の神主の家に生まれた。旧制川越中学、一高、東大政治学科、高等文官試験を経て大正一四年、朝鮮総督府入府し平安南道庁(道庁／平壤)配属、忠清北道(道庁／清州)学務課長、慶尚北道(道庁／大邱)警察部長、総督府(府庁／京城)警務局警務課長、総督官房人事課長、司政局勅任事務官、専売局長を経て終戦時は通信局長であった。

旧制川越中学時代(第一七回卒、大正七年三月卒)、大正デモクラシーの時代風潮の中、旧制川中の初代校長(増野悦興)が重んじた「自主、品格、自由主

義的にして生徒の自発性を尊重。」の学風に共鳴していたとの記録(埼玉県立川越高校「百周年記念誌／くすの木」六五頁、一九九九年発行)がある。自主自由の気風を持った教養人だったのではないかというイメージが浮かんでくる。

を深掘りするのにも意味あることと感じ入っています。それぞれ時代の風の吹く中、追い風に乘ったり、向かい風に立ち向かったり、時に無風の中に新たな蠢動を感じ取ったりした歴史上の人物に寄り添ってみるのも楽しいことと思います。

大名となり、武断から文治の時代への移行を豊かさの奨励(三富新田開発)と社寺仏閣の整備(氷川社や仙波東照宮)で推し進めた。

の近接九か村と合併を成し遂げ、大規模工業団地と大学の誘致を仕上げた。この二人からは、近代市民社会における人格の有り様と、来るべき産業社会における市／自治体の基盤構築の面において、川越は先駆的布石を打ってもらったと言えます。

る布石を打ってくれる人物を引き寄せているとしたら、川越にはそれなりの人々が暮らしているとも言えるのでありましょう。

旧制川越中学の同期卒には竹内栄吉(大阪高等工業

川越を物語る私の前に、今は五人の人物がスクッと姿を現してきます。川越の歴史で先の世の布石を打

開(川越平／夏袴のブランド化など)を助言した。

彼ら先人たちは、今、何を語るのか耳を傾けたくな

・川越市史資料集第二集／川越市・村合併聞き書 昭和四二年

／醸造科卒、生家・(株)鏡山

歴史で先の世の布石を打

彼ら江戸時代を一步推し

が打った布石が重層化し、

・川越藩／シリーズ藩物語 重田正夫著 現代書館 二〇一五年

酒造社長)、藤野忠次郎(二

てくれた、このような人

進めた知恵者が川越に深く

その上に川越の歴史的風土

・人物叢書／松平信綱 大野瑞男著 吉川弘文館 二〇一〇年

高、東大法学科卒、(株)三菱

物との対話をしたくなりま

関わっていたことを知ると

は醸成されています。

・柳沢吉保の実像 野澤公次郎著 柳沢吉保の肖像 野澤公次郎著

の朝鮮総督府総督は阿部信

す。お陰様で今、川越はそ

かさを実感しました。

併せて今の川越があるの

・海保青陵の富国策 経世済民から経営へ 青柳淳子著／幕藩制転換期の経済思想、小室正紀編著 慶応義塾出版会 二〇一六年

行(陸軍大臣、首相経験者、

しつとも、その味を失わず

／来るべき社会を担う人材

性、時代の風を好む風土

・川越中学校の建学の精神と初代校長増野悦興の生涯 編著／発行 滝澤民夫 発行協力・県立川越高校同窓会 二〇一四年

終戦時、朝鮮へ自治権を与

存続していますと。

△明治後期…増野悦興

は、江戸／東京との程よい

・川越市史資料集第二集／川越市・村合併聞き書 昭和四二年

えた。戦後、A級戦犯容疑

網／大火にあった江戸のま

育成を掲げて設立された埼

／遊び心(文人墨客の遊蕩

・川越市史資料集第三巻近世篇 川越市発行 昭和五八年

で逮捕されたが開廷直前に

ちを脳裏に描き、啓蒙領主

玉県第三中学校(旧制川越

地、外の才人を受け入れる

・川越市史資料集第二集／川越市・村合併聞き書 昭和四二年

名簿から除外)であった。

として領国経営の形態(城

中学校)の初代校長として、

気風)の存在がうまく噛み

・川越市史資料集第三巻近世篇 川越市発行 昭和五八年



伊藤泰吉元市長

耳を傾けたい先人たち

改めて川越の歴史的地層

△江戸時代初期…松平信綱／大火にあった江戸のま

△昭和戦後…伊藤泰吉／戦後の川越市の復興の礎に

「朋有り遠方より来る、亦

・川越市史資料集第二集／川越市・村合併聞き書 昭和四二年

保／元禄期、初めて城持ち

練な手腕で川越藩の城付地

気風が、川越の地に価値あ

・川越市史資料集第三巻近世篇 川越市発行 昭和五八年

雁の記

川越散策日記

初雁公園の国旗掲揚塔

荒牧 澄多（高二十七回）

前回、三芳野神社を訪れましたので、ついでに近くを歩いてみましょう。

初雁球場の一塁側フェンスに沿った駐車場に、国旗掲揚塔があるのは、御存じですか。普段は、車の陰になって見ることが多く、見過ごされ勝ちです。



昭和十六年掲揚塔の写真

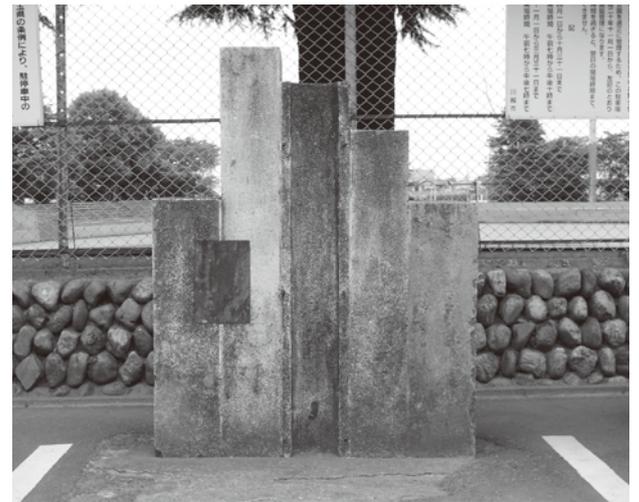
高さの異なる五本の杭が並んだ形状で、一番高いものは六尺ちようどです。人造石研出し仕上げで、色

は左から、青、黄、黒、緑、赤となっています。左端は一見黒く見えますが、よく見ると下地モルタルにわずかに青い塗料が見てとれます。この配色はどこかで見たような……。そうです

オリンピックのシンボルマークに使われている色です。並び順も同じです。では、いつ建てられたのでしょうか。銘板が嵌め込まれてい

ますので見てみましょう。そこには、皇紀二五九八年と書かれています。すなわち、一九三八年（昭和十

三）の二年後の四〇年には、第十二回オリンピックが東京で開催される予



初雁球場駐車場にある国旗掲揚塔

定でした。

この配色は、オリンピックを意識したものと考えてもいいのではないのでしょうか。

ちなみに、昭和十六年にされる写真では、向きが逆に建っているように見えます。昭和二十七年に初雁球場建設の際に移設されたので

しょう。グラウンドより一段と高い位置にあるここに掲揚された日の丸を、多くの市民が仰ぎ見たことでしょう。

では、ここに書かれた前川道平氏とはどんな方だったのでしょうか。

明治二六年に、川越鍛冶町の北野俊太郎の五男として生まれます。しかし、家は明治の大

火後で新築中のため、母親の実家である旧吉見村青山

の根岸家（現友山・武香ミュージウム）で生まれました。鍛冶町北野家という

と、山吉ビルの並びにある現在の荻野銅鉄店（町徳）です。明治時代は、釜屋と

いう屋号で鉄物商を商うとともに、度量衡の販売所にもなっていた川越屈指の名家です。

「学業を終えた後（翠樹園による）」、南町の安齋家（旧八十五銀行本店の北側）の世話により横浜の茂木商店を経て、七十四銀行（現横浜銀行の前身銀行の一つ）に勤めます。そして、叔母の嫁ぎ先である前川家の娘と結婚入りし、前川姓を名乗ります。

なお、前川家は近江出身の大綿織物商で、後の富士紡を立ち上げています。また、現在の朝日生命の前身保険会社の創設にも関わっています。

道平はその後、伊勢丹の社長になりますが、彼の名を有名にしたのは、第二回東京優勝大競争（日本ダービー）で優勝した「カブトヤマ」の馬主としてでしょう。

前川の名前が刻まれた銘板



この銘文を見るとグラ

ンドの建設に際して多額の寄付をしているようです。現やまぶき会館の場所に建てていた旧図書館建設の際にも、千円を寄付しています。

しかし、この道平を顕彰するこの塔は、誰が作ったものなのか？銘板に記されていませんので不明のままです。

なお、前川（北野）道平の名前は、同窓生名簿で見つけることができませんでした。当時の商家の子供達は、義務教育を終えた後、どのような道を歩んだのでしょうか。

次回以降、その傍らに立つラジオ塔もご紹介できればと思います。

参考図書 「岸伝平著 北野家々史 翠樹園 北野家蔵版 昭和六年一月三日発行」 「図説川越の歴史 郷土出版社」 及びインターネット

十六回初雁会ゴルフコンペ



川越カントリークラブでの集合写真

令和元年三月十九日、コロナの流行が心配されましたが、初雁会ゴルフコンペが川越カントリークラブにて三十名の参加をいただき、実施することができました。優勝は実力者の馬場弘様、準優勝は島田邦生様、三位に梶田進一でした。

なお、今回の表彰式は簡素に済ませ三十分程で解散しました。次のコンペもこのような社会状況を吹き飛ばす元気な皆様の姿が見られますようお願いしております。

優勝者インタビュー

馬場 弘 (高十二回)

とても気持ちの良い天気でした。十二回卒の同窓生、大木、斉木、塩野君と楽しくラウンドできたおかげで、ベストクロスで優勝する事ができました。今後とも体力の続く限り、先輩を見ながら、参加したいと思っています。

第十七回ゴルフコンペのご案内

ゴルフ同好会幹事 松本 寛
日時 令和二年十月十四日 集合 八時十五分
場所 川越カントリークラブ
会費 四千元(パーティー費)
プレー費は各自精算
返信期日 九月十日までに葉書にて返信ください。

年会費振込のお願い

今年も総会を開催できないので、年会費(二千元)を直接集める機会がありません。よって、全員の方に振込をして頂くことになりました。恐れ入りますが下記振込先にお早めに納入をお願いいたします。

振込先

- 名称 川越初雁会
- ① ゆうちよ銀行
- 038 支店 普通
- 普通 5518771
- ② 埼玉りそな銀行
- 本川越支店 普通預金
- 普通 4163922

広報委員会からのお願い

歴史的に百年に一度の地球規模の変化に立ち会っている私たちの、いまの感想を多くの方に記して頂きたくて、原稿を募集することにしました。この、感想をとりまとめて、次号の会報を発行する企画を考えました。

原稿は手書き、紙媒体、電子データ、何でも結構です。文字数も特に制限を設けません。紙面の都合で、割愛、または次の号に掲載させて頂きます。

川越初雁会事務局まで、投稿ください。ぜひ、協力をお願いいたします。

雑感

松村 定明 (高二十回)
建築業なので、現状ではコロナ前からの受注があり完成までの時間差があるためと、三密に縁遠い仕事内容であるので、現状では大きな影響は出ていないのですが、今後の経済の影響で仕事の量が減ると思われる、なすすべもなく戦々恐々とするばかりです。

昭和五年規模の大不況に見舞われ、コロケとサシマの開きが、ご馳走だった頃の生活に戻る不安に駆られながら、家飲みを強いられる日常です。

今回広報の発行は、行事が中止になってしまったことなど、記事がなくて四苦八苦の発行になりました。

発行人

会長 岩堀 弘明
事務局長 加島 篤人
事務局 川越市六軒町一三十三番地
題字 吉沢翠亭(義和)
印刷 (株)櫻井印刷所